

# 丹波佐吉の狛犬新記載—西・蛭子神社

磯 辺 ゆ う

奈良文化女子短期大学

A New Known Stone Komainu Made by Sakichi of Tanba: Nishi-Hiruko  
Yu Isobe

*Narabunka Women's College*

幕末期の名人石工丹波佐吉の新たに発見された狛犬を記載し、その全体の形態的特徴等について佐吉を模した狛犬および他の佐吉狛犬と比較、検討する。様式上、本狛犬は佐吉の第Ⅲ期に属する。

キーワード：石造狛犬、丹波佐吉、江戸時代、奈良県大和郡山市、蛭子神社

## 1. はじめに

幕末期に大和、大坂を中心に活躍した名人石工丹波佐吉の石造物について、比較検討を行ってきた<sup>1)~5)</sup>。丹波佐吉の狛犬は名高く、従来18件が知られてきたが、新たな狛犬が発見されたので、ここに19件目として新記載を行った。今回、作者および制作順の検討を要したため、他の石工による模作をとりあげ、それらと佐吉狛犬および佐吉狛犬相互の比較を行った。本作は佐吉の第Ⅲ期に属し、模作も同期と関連が深いため、特に第Ⅲ期狛犬の特質を掘り下げた。発見者は「古道紀行おおばこの会」の亀山幸治氏と竹市信一郎氏で、ブログ「石仏の辻」<sup>6)</sup>に報告されている。狛犬番号は、S17 (S5-S6) 醍醐・春日、S18 (S10-S11) 八滝・五社 (番号は再記載時のもの<sup>5)</sup>) 同様、制作順がわかるように、本来の番号S19に前後の狛犬番号 (S10-S18) を付け加えたものとした。なお、S18八滝・五社は、すぐ前に今回のS19西・蛭子が入ったため、本論文以降 ( ) 内の番号を変更しS18 (S19-S11) とする。基本的な方法及び型の名称・記号は磯辺<sup>1)、2)</sup>、磯辺・小寺<sup>4)</sup>と同じである。

## 2. 記 載

S19 (S10-S18) 西・蛭子神社 (萬延元年申年九月吉日1860、阿：奉獻、氏子中、萬延元年■■■■・若中、咩：奉獻、氏子中、申年九月吉日、石工和泉屋庄吉)。銘なし。

磯辺 ゆう 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学

奈良県大和郡山市西町良福寺同境内。ブログ「石仏の辻」<sup>6)</sup>。図1、図2、表2、表3、表4。

大型、特に全長、体長に顕著。胸よりも頭部が前に出ている。阿吽とも斜めこちら向き。体高/体長低め、体高/胸幅高め。つまり前後（頭一尻）に長く、胸の幅は比較的狭い。特に阿にその傾向が強い。吽は阿程頭が前に出ないので、体長は、阿よりかなり短い。阿：雄、吽：雌雄なし。吽の角ほとんど不明。鬣阿吽とも後向き。目と鼻先間短い。耳の毛長く顎付近まで流れる。顎鬚長。犬歯2対。胸紋なし。尾：流れ毛、尾の付け根は貫通せず、尾毛束-阿：上向き毛束1の先は二股になり体の前方および左前方下に流れる、後面中央渦1、尾の側面の毛束は左4（渦と流れ毛がセットになった束）、右3（渦と流れ毛セット）+1（流れ毛のみ）、吽：上向き毛束1の先は一つで体の右前方に流れる、後面中央渦なし、尾の側面の毛束は左右とも3（渦と流れ毛セット）+1（流れ毛のみ）。背骨菊紋明瞭、その数、阿：3、吽：2（前の菊紋はほとんど鬣に隠れている）。後脚後方に向かって毛が流れ、先に渦なし。後脚間の窪めやや浅いが仕上げ良好。前脚付け根：阿吽とも高さが手前側（拝観者）で低く、頭はかなりせり出しているが、前後方向には左右でほとんど違いがない。

阿の下顎と右後脚、州浜に剥離がみられる。

狛犬：砂岩、台座Y型：花崗岩、基壇c2型：花崗岩。州浜四方から脚が見える。州浜の枠線四角、台座・基壇に枠線なし。



①阿-横



②阿-前



③阿-尾



④吽-横



⑤吽-前



⑥吽-尾

図1、S19 (S10-S18) 西・蛭子神社狛犬1



図2 S19 (S10-S18) 西・蛭子神社狛犬2

矢印：ほとんど隠れている菊紋

### 3. 考 察

本狛犬は尾の形から第Ⅲ期のものとなる（図1-③、⑥）。第Ⅲ期の最初から最後まで約2年間の狛犬について、その間に含まれる第Ⅳ期の1件も含めて表1に整理した。本狛犬には銘がないため、佐吉の狛犬であるという判断が必要である。さらに、同年に奉納されたS18八滝・五社神社狛犬の奉納月が不明なために、両者の前後関係について考える必要がある。その2点については、考察の後半で、他の第Ⅲ期狛犬との形態的な比較を行って検討したい。その結果を前提として先に全体的な形態比較を行うこととする。

表1 第Ⅲ期およびその期間内に含まれる第Ⅳ期狛犬

期	尾の型	狛犬番号	神 社	奉納年月(西暦)		場 所
第Ⅲ期	炎	S8	伴堂・杵築神社	安政六年	四月(1859)	奈良県三宅町
	流れ毛	S9	下永・八幡神社	安政六年	九月(1859)	奈良県川西町
	炎	S10	永原・御霊神社	安政七年・万延元年	三月(1860)	奈良県天理市
	流れ毛	S19(S10-S18)	西・蛭子神社	万延元年	九月(1860)	奈良県大和郡山市
第Ⅳ期	ヤツデ・渦	S18(S19-S11)	八滝・五社神社	万延元年	不明(1860)	奈良県宇陀市
第Ⅲ期	流れ毛	S11	柏原・八幡神社	文久元年	五月(1861)	兵庫県柏原市

なお、第Ⅲ期狛犬の設置場所は、最後のS11柏原・八幡を除いて、奈良盆地内平野部の比較的近い範囲にある。

### 3.1 尾の形

第Ⅲ期を特徴づける尾には、炎型と流れ毛型の2型がある(表1)。炎型は尾の先が上に向かって伸びるろうそくの炎のような形(図7-③)であり、流れ毛型は中央を含む全ての毛束が前に流れて丸くなっているものである(図3)。この二つの型は表1でわかるようにほぼ交互に作られている。本狛犬の尾は流れ毛型で、1年前に奉納された、地理的に最も近いS9下永・八幡と大変良く似ている(図3)。両者とも、横の渦巻き毛は、阿吽の左右とも縦一列である。もう一つの、そして第Ⅲ期最後の流れ毛型S11柏原・八幡の尾はもっと厚みがあり、毛束は立体的にダイナミックに流れ、この2件の狛犬とは異なっている<sup>1)</sup>。

なお、S19(S10-S18)西・蛭子の阿の尾の中央に渦が一つある(図1-③)が、S9下永・八幡、S11柏原・八幡はともに無い。



①西・蛭子神社-吽 ②西・蛭子神社-阿 ③下永・八幡神社-吽 ④下永・八幡神社-阿

図3 S19(S10-S18)西・蛭子神社狛犬とS9下永・八幡神社狛犬の尾

### 3.2 狛犬の大きさ、様式、石材

S19(S10-S18)西・蛭子はかなり大型である。特に阿で、全長、体長が長く、全体でもトップクラスである(表2)。しかし体高はそれほどでもなく、そのため体高/体長は低い値である。それに対し吽の大きさは、全長72cm、体長62cm、体高76cm、胸幅33cmであって、全長、体長が阿よりかなり短い。州浜の大きさは阿吽でそれほど変わらず、頭部のせり出し方に相違がある。阿では胸部より上全体が前脚に比べて大きく、ややバランスを欠き、斜め前方に頭をせり出している(図1-②)。それが全長、体長が大きいことにつながっている。胸幅は阿吽とも大きさの割に狭く、体高/胸幅は、阿-2.5、吽-2.3とほぼ高い値を示している。尾の縦/横では、形が最も近いS9下永・八幡に近い。

形態上の多くの特徴(表3)でも、S19(S10-S18)西・蛭子は、第Ⅲ期によく収まる。さらに背骨の菊紋や後脚後方の渦数(0)などをはじめとする多くの特徴が、S9下永・八幡によく一致している。

基壇は単純な重ね石2段のc2型(図2-①)で、和泉屋庄吉の手になる。表4では、基壇制作者が佐吉以外である場合のみ記述しており、空白欄はほぼ佐吉と考えられる。全体として佐吉自身は基壇を

aかb型で造り、c、d型は他の石工が手掛けた場合のみであることがわかる。また、S19（S10－S18）西・蛭子の州浜、台座、石材も、S17（S5－S6）醍醐・春日制作時に大宇陀の山を下りて<sup>4)</sup>以降の典型的な形である。

表2 狛犬の大きさ（阿像 単位cm）

期	狛犬番号と神社		狛犬						尾	
			全長	体長	体高	胸幅	体高/体長	体高/胸幅	縦	縦/横
第Ⅰ期	S1	平井・八王子神社	37	30	46	21	1.5	2.2	27	1.5
	S2	丹生川上神社	63	54	65	33	1.2	2.0	53	1.6
第Ⅱ期	S3	神楽岡神社	74	66	76	35	1.2	2.2	47	1.5
	S4	宇太水分神社	80	64	81	40	1.3	2.0	54	1.3
	S5	久米御縣神社	70	53	72	35	1.4	2.1	51	1.7
	S17(S5-S6)	醍醐・春日神社	70	56	71	34	1.3	2.1	46	1.3
	S6	興留・素戔鳴神社	72	62	83	34	1.3	2.4	55	1.2
	S7	藤森・十二社	66	60	69	28	1.1	2.5	47	1.5
第Ⅲ期	S8	伴堂・杵築神社	73	69	93	36	1.4	2.6	65	1.8
	S9	下永・八幡神社	75	65	89	38	1.4	2.4	58	1.5
	S10	永原・御霊神社	64	59	75	31	1.3	2.4	64	2.7
第Ⅳ期	S19(S10-S18)	西・蛭子神社	80	68	79	32	1.2	2.5	51	1.6
第Ⅳ期	S18(S19-S11)	八滝・五社神社	64	56	66	30	1.2	2.2	45	1.3
第Ⅲ期	S11	柏原・八幡神社	64	52	71	30	1.4	2.4	33	0.8
第Ⅳ期	S12	沢・白山神社	64	52	64	30	1.2	2.1	42	1.3
	S13	岸和田・兵主神社	75	69	85	35	1.2	2.4	56	1.4
	S14	神岳神社	60	54	65	31	1.2	2.1	44	1.3
	S15	阿波神社	52	44	60	25	1.4	2.3	35	1.1
第Ⅴ期	S16	園部・摩気神社	73	62	73	32	1.2	2.3	45	1.6
その他	U	牟佐坐神社	77	69	87	38	1.3	2.3	70	1.7
	K	三井神社	63	57	69	34	1.2	2.1	45	1.4

注1 全長：鼻から尾の後端まで、体長：鼻から胴または後足の後端まで、  
体高：前脚下端から頭上端まで、胸幅：胸の最大幅。

注2 S7とS13は平成に再建されたもの。以下表3、4も同様。

注3 磯辺<sup>5)</sup>表1にS19(S10-S18)を付加し、S18(S19-S11)の番号を変更した（本文参照）。

表3 佐吉狛犬の特徴

狛犬番号	期	尾	体高	体高/胸幅	顔向き	目鼻間	顎鬚	鬣	流れ	方向	阿	咩	耳	胸のすじ	犬歯	胸紋	背骨紋	後脚後方渦		
S1	I	O	46	2.2	斜めこちら向き	長							平		1	無				
S2			65	2.0															前	前
S3	II	Y	77	2.2		中	短							無				菊	0	
S4			81	2.0																前
S5			72	2.1		前	後													
S17(S5-S6)			71	2.1		後	前													
S6			83	2.4		前	後													
S7			69	2.5		後	後	有	2	咩	?									
S8	III	H	93	2.6		短	中						流れ					菊	1	
S9			89	2.4															後	後
S10			75	2.4		後	後			丸	1									
S19(S10-S18)			80	2.5		後	後			菊	0									
S18(S19-S11)	IV	YU	66	2.2		短	長							無				丸	0	
S11			71	2.4																前
S12	IV	YU	65	2.2		中													菊	0
S13			85	2.4																
S14			65	2.1	前	後	平													
S15			60	2.3	後	後	流れ													
S16	V	O	73	2.7	阿咩正対	長	中					平	有	2	阿咩	菊	0			
																		2		

注1 尾の型 O：扇、Y：ヤツテ、H：炎流れ毛、YU：ヤツテ渦

注2 S8の背、脚等に多数の菊紋があるが、胸にはない。

注3 磯辺<sup>5)</sup>表2にS19(S18-S11)を付加し、S18(S19-S11)の番号を変更した。

注4 ?は平成作には無いが元来は不明。

(各特徴の詳細は本文及び磯辺<sup>2)</sup>を参照。)

表4 佐吉狛犬及び参考狛犬の州浜、台座、基壇の特徴

狛犬番号	期	州浜		台座		基壇		石材			
		型	模様	型	枠線	型	作者	狛犬・州浜	台座	基壇	
S1	I	A	4面模様つき	X	-	a	他	土地の石	土地の石	土地の石	
S2		B		X	-	-		赤石	赤石	赤石	
S3	C	X'		◎	b	赤石		赤石	赤石		
S4	C	X'		◎	b	赤石		赤石	赤石		
S5	C	Y		○	b	赤石		赤石	赤石		
S17 (S5-S6)	II	D		Y	-	c1	龍田石工	砂岩	花崗岩	花崗岩	
S6		C		Y	-	c2		砂岩	花崗岩	花崗岩	
S7	III	不明		Y	-	b	和泉屋	不明	花崗岩	花崗岩	
S8		C		Y	○	b		砂岩	花崗岩	花崗岩	
S9		C		Y	-	b		砂岩	花崗岩	花崗岩	
S10		C	Y	-	b	砂岩		花崗岩	花崗岩		
S19 (S10-S18)		C	Y	-	c2	和泉屋		砂岩	花崗岩	花崗岩	
S18 (S19-S11)		IV	C	Y	-			b	他	花崗岩	赤石
S11		III	C	Z	○	b		柏原石工		砂岩	砂岩
S12		C	Y	-	d	他			砂岩	花崗岩	花崗岩
S13		IV	不明	Y	○			b	不明	花崗岩	花崗岩
S14			C	Y	-	d		他	砂岩	花崗岩	花崗岩
S15	C		Y	-	b	他	砂岩		砂岩	花崗岩	
S16	V		B	前後模様つき	Y		-	a	土地の石	土地の石	土地の石
U	K	足つき	側面模様つき	Y	-	c1	他	砂岩	花崗岩	花崗岩	
K		足なし		Y	-	c2		他	砂岩	花崗岩	花崗岩

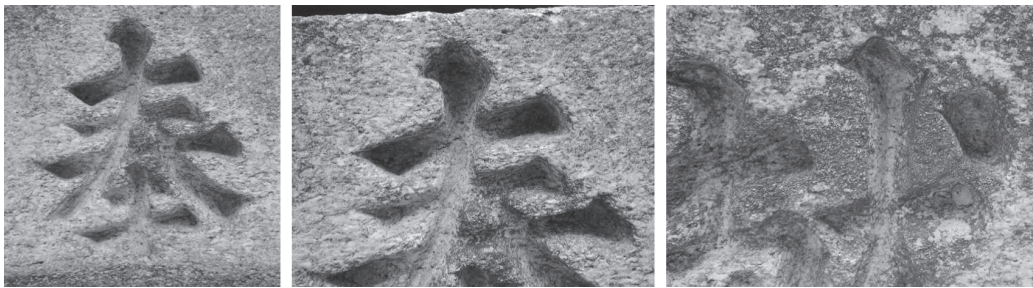
注1 枠線 ○：あり、◎：多くあり、-：なし。

注2 c1、c2の数字は段数。

注3 磯辺<sup>5)</sup>表3にS19(S10-S18)を付加し、S18(S19-S11)の番号を変更した。  
(型の詳細は磯辺・小寺<sup>4)</sup>参照。)

### 3.3 「奉献」の文字

S19(S10-S18)西・蛭子では、「奉」の左払いがカーブしている(図4-①)。佐吉の典型的な文字は、左払いがほぼまっすぐで太く力強い<sup>1)</sup>。そのような佐吉の文字の中で最もカーブしているのは、S10永原・



①西・蛭子神社

②西・蛭子神社-奉・上部

③西・蛭子神社-献・上部



④永原・御霊神社

⑤永原・御霊神社-奉・上部

⑥永原・御霊神社-献・上部

図4 S19(S10-S18)西・蛭子神社とS10永原・御霊神社の「奉献」

御霊である(図4-④)。S19(S10-S18)西・蛭子とS10永原・御霊を比べた時に気がつくのは、筆の入り方の違いである。「奉」の左払いを見ると、S19(S10-S18)西・蛭子ではまず力を入れてから入っているのに対し、佐吉(S10永原・御霊)は軽く入っている(図4-②、⑤)。「献」と「獻」の旁「犬」の左払いの入り方(図4-③、⑥)や、「奉」の横棒の入り方(図4-②、⑤)も同様である。全体に佐吉は柔らかな筆使いなのに対し、S19(S10-S18)西・蛭子は硬く、別人の文字とみることができる。

「奉」の縦の長さ(最も深い部分)の深さ(最も深い部分)の関係も、S19(S10-S18)西・蛭子では大きさの割に浅い(図5)。第II、第III期の佐吉は、図5でわかるように明瞭に深く彫っている時期である。その中で特に彫りが浅いのは、S19(S10-S18)西・蛭子以外では第II期のS17(S5-S6)醍醐・春日である。第III期の間にある第IV期S18(S19-S11)八滝・五社も浅く、ともに他の石工の手になっている<sup>4)、5)</sup>。なお、S2丹生川上神社も文字の大きさの割に他に比べてやや浅いが、それは第II期の最初であり、佐吉の彫り方が深くなり始めた頃のものである。図示したのは阿の場合だが、昨ではもっと深くなっている<sup>2)</sup>。

文字の形、筆使い、彫りの深さをあわせて、S19(S10-S18)西・蛭子の「奉献」は他の人物による彫りとみなすことができ、それは恐らく台座に名前がある石工和泉屋庄吉であろう。

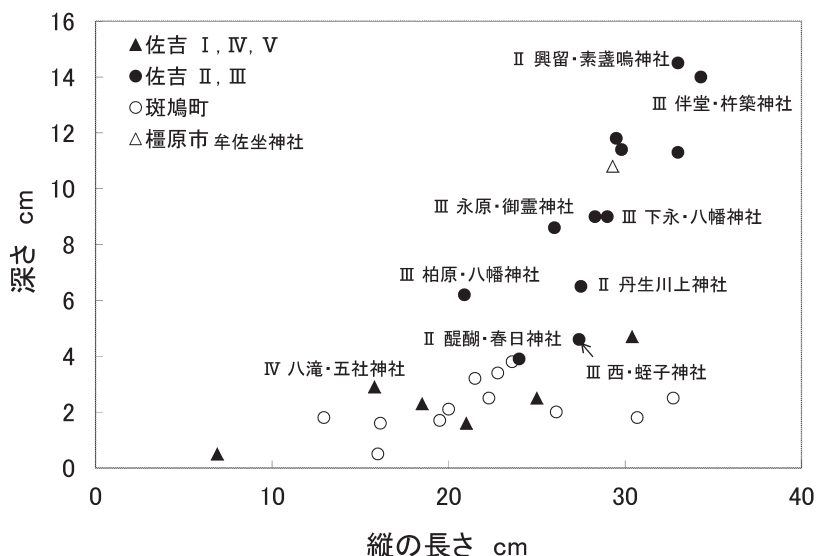


図5 「奉」の縦の長さに対する彫りの深さ  
磯辺<sup>5)</sup> 図5に追加。いずれも阿のデータ。

### 3.4 作者

本作の作者が佐吉かどうかを狛犬の作風から判断する。佐吉の狛犬の比較的確認しやすい特徴は、まず独特の顔の表情で、獅子舞の獅子頭に近く上下に平たい顔である。さらに、州浜にやや形の違いはあるものの脚と細い杵線があること、筋肉の盛り上がりまでを写し取ったりアルな体型、特に前脚がしなやかであること、体にひねりがあること、後脚の間がていねいに彫りこまれていることがあげられる<sup>2)</sup>。また参考になる特徴としては、台座に刻まれている「奉献」の文字の形と彫りがある<sup>1)、2)</sup>。これらの中には佐吉にしかない特徴もあるが、他の石工による狛犬でも時々見られる比較的似た特徴もある(州浜に脚がある、獅子頭の頭一八重垣型<sup>7)</sup>、など)。また、佐吉自身が変化していくことも念頭におかなければなら

ない。一方、職人として、佐吉の狛犬にどこまでも迫りたいという意識のもとに、他の石工が模倣することもあり得るので、単に上記の特徴のいくつかを確認するだけでは、佐吉と判断することは危険である。

一方で佐吉の狛犬は、全体として、体が柔軟で、なめらかで、動きがあり、迫力がある。この印象は明瞭に迫ってきて、他の狛犬と区別できる大きな点である。このような印象がどこからくるのかを探るために、佐吉の狛犬を強く意識して造られている狛犬と比較してみよう。以下に2件を取り上げるが、いずれもモデルにしていると考えられるのは佐吉第Ⅲ期の狛犬である。

①神明神社狛犬（天理市）（阿：奉、大和住人石工嘉吉三輝作、辻村安太郎、全 武治郎、祈武運長久、咩：猷、昭和十四年1939十一月建之、朝鮮東業、辻村直三）

奈良県天理市川原城町。図6。



図6 神明神社狛犬とモデルとされた佐吉第Ⅲ期狛犬



本狛犬は、昭和14年（1939）奉納で、狛犬州浜に石工名が明記されており、佐吉の狛犬でないことは明瞭である。しかし、佐吉狛犬をよく模倣しているのでここにあげた。石工名や奉納年不明の時これをどのように見るのかということになる。

本作は、佐吉狛犬の最も目立つ特徴である平たい獅子頭、長く垂れる耳、表情のある前脚等、非常によく似せてある（図6-①、④、⑤）。尾が炎状に上に向かって、左右に渦巻き毛が各2列ある（図6-①）。炎型の尾は佐吉に2例あるが（表1）、渦巻き毛が2列と体中に菊紋がある<sup>1)</sup>という点で佐吉第Ⅲ期最初のS8伴堂・杵築に最も近い。「奉獻」もS8伴堂・杵築をほとんどそのまま写している（図6-⑦、⑧）。ただし、プロポーションに関しては、背の高いS8伴堂・杵築よりもやや低く、S10永原・御霊（図6-②）に近づけていると考えてよい。S10永原・御霊は天理市にあり、神明からは地理的に最も近い佐吉狛犬である。なお、石工名「嘉吉三輝」は「佐吉照信」とよく似ており、さらに「大和住人」という形容も、S8伴堂・杵築に「大坂住石工佐吉」と刻まれていることをモデルにしていると考えられる。

佐吉による前脚は、大変難しい形で、脚の付け根幅よりもつま先で左右の間隔が狭くなり、体重を拝観者側（吽の場合右）にあずけて体を拝観者側にせり出しているが、この点もクリアできている（図6-⑤、⑥）。おそらく本狛犬は、昭和という奉納の時代から考えて、形の設定および「奉獻」の文字の写しに写真を用いたとみてよい。

ところが、一見して佐吉狛犬と違うという印象をもつ。相違は第一に口角にある。佐吉の狛犬の口角は鋭角である（図6-②、③）が、神明では四角い（図6-①）ので顔の印象が異なってくる。さらに佐吉狛犬は、ともに、はるか遠くを見とおしているが、神明はそうではなく、やや力なく立っているよ



①神明神社－尾 ②神明神社－尾の横渦 ③伴堂・杵築神社－尾 ④伴堂・杵築－尾横の渦



⑤神明神社－後脚の菊紋 ⑥伴堂・杵築神社－後脚の菊紋

図7 神明神社とS8伴堂・杵築神社の尾と菊紋の彫り方

うに見える。それは、姿勢の相違による（図6-①、②、③）。佐吉狛犬は、背の高さに関わらず、背を伸ばし、顎を大きく上げている。一方神明は背がやや猫背に丸く、顎をひいているので、全体として勢いが感じられず、おとなしいのである。第IV期に入ると佐吉狛犬も全体に首が太くずんぐりした感じになるが、背中が猫背になることはない。今回検討しているS19（S10-S18）西・蛭子神社狛犬は、頭が高い位置ではなく前に出ている傾向があるものの、背を伸ばし、顎をあげている（図1-①、④）。

彫り方にも明白な相違があり、尾の渦巻き毛と菊紋を例として図7に示す。渦巻き毛は佐吉の場合柔らかな毛を感じさせるが、神明では模式的である（図7-②、④）。菊紋は一本一本の毛筋の表現に違いがある。佐吉によるS8伴堂・杵築神社の場合、筋の先に向かって細く浅くなっていくのに対し、神明では先が太く深くなって、毛流れのような柔らかさが出ていない（図7-⑤、⑥）。この様な彫り方の相違は全身に及んでおり、印象を決定している大きな要因となっている。神明の硬い彫り方は、機械使用をイメージさせる。

全体を見た時、このような特徴がまとまって、力の無さという印象につながってくるものと考えられる。なお、佐吉狛犬には必須の背骨がこの狛犬には無く、一方、胸に菊紋を持たないS8伴堂・杵築（表3）とは異なって、全身の他に胸にも菊紋がある。

次の例は、ほぼ同時代、幕末のもので、すべて手彫りである。

②春日若宮神社（大和高田市 野口）（阿：奉、慶應三卯年（1867）、宮講中、吽：納、九月吉日、宮講中）。  
「奉獻」は別人の文字と彫り。

奉納年は浅く読みにくい、大和高田市史<sup>8)</sup>に記されている宝暦子年（1756）ではなく、慶應三年卯年（1867）と読むべきである<sup>1)</sup>。

本狛犬には佐吉狛犬風な獅子頭と柔らかに置かれた脚がある。特に前脚は、幕末期によくある棒のような脚ではない。前から見た時、胸幅よりもつま先間が狭くなっている点（図8-③）は、佐吉狛犬をよく研究しているといつてよい。ただ州浜は一般的な簡単なもので足も模様もない。尾（図8-④）は平たいが、ほぼ炎型に近く、阿吽とも中央に渦巻きがある。直毛束1、横渦左右に各2列で、佐吉第Ⅲ期と同様である。ただし、炎型に比べると全体に幅広で平たいが、ヤツデ型程後面が平らでなく膨らみと厚みがある。この幅広で厚みのある概形は第Ⅲ期への移行期にある、地理的にも最も近い、第Ⅱ期最後の大和高田市S7藤森・十二社に近い。しかし、S7藤森・十二社の尾の巻き毛は1列で、直毛束が複数ある<sup>1)</sup>点で異なっている。しかも、残念なことにS7藤森・十二社の現物は残っておらず、現在は元の狛犬に倣って作られたらしい平成作なので、詳細を比較できない。一方、S8伴堂・杵築の尾の場合、巻き毛2列、直毛束1本で、本狛犬はそれに近いともいえる。そこで、比較対象とする佐吉狛犬は第Ⅲ期のものとする。

本狛犬は、佐吉狛犬の脚の表情をよく研究しているが、残念なことに佐吉の境地に及んでいない。佐吉狛犬の多くの場合、S8伴堂・杵築のように頭がかなり斜め前方にせり出している。そのため佐吉は、前脚の左右の付け根の高さと前後の位置をずらして、上体にひねりを出し、さらに前脚の左右の傾きにも明瞭な相違をつくりだしている（図6-⑥）。

佐吉第Ⅲ期狛犬の中で最も前脚左右の傾きに違いが少ないのは、S10永原・御霊である（図8-⑦）。

しかし脚の付け根の高さには左右で相違があり、頭が斜め前方（拝観者側）に出ている感じがある（図8-⑦）。前から見た時、春日若宮では、左右の脚の付き方にそのような相違はなく、頭はほぼ胸の上に安定して乗っている（図8-③）。さらに、春日若宮では、前脚の肘を曲げている（図8-①）。肘を曲げている場合、脚はそっと置かれているようで、そこに柔らかさが醸し出されるが、かがんだような姿勢になる。一方、S10永原・御霊では、前脚は大変なめらかで柔らかな表情であるが、肘を曲げていない（図8-⑤）。つま先付近で湾曲しながらも、力強く上体を支えている。斜め前方から見ても、その違いは明瞭である（図8-②、⑥）。S19（S10-S18）西・蛭子は明瞭に佐吉狛犬の側にある（図1-①、④、図8-⑧）。



図8 春日若宮神社狛犬とS10永原・御霊神社およびS19西・蛭子神社狛犬の姿勢

さらに春日若宮がS10永原・御霊と異なる大きな点は、顔の表情である。阿の口角は春日若宮、S10永原・御霊、S19（S10-S18）西・蛭子いずれも鋭角で、笑っている（図9-①、②、③）。しかし春日若宮では下顎の伸び方が少なく、ややうつむいている。そのためひき締まらない表情である。S10永原・御霊の場合、顎を伸ばし、しっかりとあげているので、やはり遠くまで見通しているようである。S19（S10-S18）西・蛭子も顎をあげ、ほぼS10永原・御霊と同様の表情をしている（図9-③）。

彫りの深さでも、巻き毛の立体性と柔らかさに大きな相違がある（図9-④、⑤）。さらに、耳の先は、春日若宮では、渦巻き毛の下に入っている（図9-④）が、佐吉狛犬で、そのようなことは見られない（図9-⑤）。これらの点以外にはっきりと異なるのは、後脚の股の間の仕上げである。幕末期の狛犬は外見が優れていても、この股が彫りこまれず、よく仕上げられていない。しかし佐吉はこの仕上げを十分にしている。S19（S10-S18）西・蛭子も、巻き毛の立体性、耳の毛先、後脚間の股の仕上げについ



図9 模作（春日若宮神社）、佐吉作（S10永原・御霊神社）、検討作（S19西・蛭子神社）狛犬の頭部（上）および耳の先と巻き毛（下）

て同様に破綻無く良く仕上げられている（図9-⑥、図2-⑤）。

佐吉狛犬の特徴は、第一に、獅子頭、脚の表情、尾の形にあると見ることができる。模倣する場合、まずそれらを意識して形づくることになる。しかし、柔らかな体に力強さを持たせる表現、柔らかでふっくらした毛の表現は相当に難度が高いようである。その独特の迫力のある柔らかな全体像は真似のできないものであるとみることができる。

今回の、S19（S10-S18）西・蛭子神社狛犬は、間違いなく佐吉狛犬の特徴を備え、力をもって迫ってくる。どこにも、真似をした雰囲気はなく、佐吉狛犬と判断することができる。そして尾の様式からも、奉納時期からも第Ⅲ期に含まれる。

### 3.5 狛犬の時期

S19（S10-S18）西・蛭子は、「萬延元年申年九月」（1860）に奉納された。同年に奉納された佐吉狛犬は他に2件ある（表1）。S10永原・御霊の場合、阿に「安政七年閏三月」、吽に「万延元年三月」と阿吽で異なる元号が書かれている。改元は3月で、そのちょうど改元時に奉納されていることになる。S18（S19-S11）八滝・五社は「萬延改元庚申歳」で奉納月不明であるが、「改元」とわざわざ記されていることから、通常改元されて間もなくであると考えられる<sup>5)</sup>。順番としては、9月に奉納されたS19（S10-S18）西・蛭子をその後と考えるのが妥当である。しかし、狛犬の詳細な形の変遷からは違ってみえてくる。

図10(①)に示したS9下永・八幡の耳は、長く垂れながら横方向に立ち、左右に飛び出ている。この立つという特徴は、佐吉の狛犬では最初からずっとみられ、次のS10永原・御霊（図9-②、⑤）、

S19 (S10-S18) 西・蛭子でも明らかに同じである (図10-②)。しかし、S11 柏原・八幡の耳は頭部の側面に平たく張り付いており、立っていない (図10-④)。問題のS18 (S19-S11) 八滝・五社の耳は、それ以前の狛犬のように先が長く垂れているが、頭部側面に張りついて、立たないという特徴を示している (図10-③)。このような立たない耳は、次の第Ⅳ期2番目のS12 沢・白山でもやや立ちながらも引き継がれ、その後再び立つようになってくる。

前脚は、図10の左2者では直線的で、頑丈でいかつい感じである (図10-⑤、⑥)。また左右の脚の付け根の高さに多かれ少なかれ違いがある。このような脚はこれ以前の狛犬にあてはまる。一方、図10の右2者では、脚のつくり、胸の下縁ともに丸味を帯びて、全体に丸く柔らかい印象を受ける (図10-⑦、⑧)。同時に、左右の脚の付け根の高さに大きな差がない。この丸く安定して立つ形は、この後、第Ⅳ期に引き継がれていく。

このような耳と前脚の特徴から、S19 (S10-S18) 西・蛭子は先のグループに、S18 (S19-S11) 八滝・五社は後のグループに属すと考えられる。



図10 S9 下永・八幡からS11 柏原・八幡神社狛犬までの耳 (上) と前脚 (下)

S9 下永・八幡神社の次に来るS10 永原・御霊神社は図8、9を参照

### 3.6 制作事情

万延元年 (1860) は、佐吉にとってかなり忙しい年である。3月にS10 永原・御霊、9月にS19 (S10-S18) 西・蛭子、続けてS18 (S19-S11) 八滝・五社、翌年2月に大坂でS11 柏原・八幡 (文久元年1861 5月奉納) の引き渡し<sup>3)</sup>と続く。佐吉は、故郷に大変世話になった人の名で奉納するS11 柏原・八幡の狛犬には特に力を入れ、第Ⅲ期を通して、世に無い新たな狛犬を模索してきたのである<sup>2)</sup>。

その模索系列の最後になるのが、基壇を含め全て佐吉作と考えられる、端正に整ったS10永原・御霊である。その後、ややバランスを欠いて前傾している今回のS19（S10-S18）西・蛭子、そして尾の形が異なる花崗岩製のS18（S19-S11）八滝・五社（表4）が入ってくる。ともに佐吉は狛犬だけを造って、台座以下は他の石工が設置したものとみられる。佐吉は、第Ⅱ期S17（S5-S6）醍醐・春日製作時に大宇陀の山を降りてからは、細かな細工のしやすい最上級の砂岩で造ることが常であり、硬い花崗岩製は佐吉狛犬全体の中でもこの1件だけである。なお、大宇陀では現地の石を使っていた<sup>4)</sup>。

S10永原・御霊の後の2件は、急ぎの仕事だったのだろう。大急ぎで、それでもこの時期の特徴である流れ毛の尾をもったS19（S10-S18）西・蛭子を造り、続いてS18（S19-S11）八滝・五社をさらに急いで造ったのではないだろうか。S18（S19-S11）八滝・五社では緊急度が増し、恐らく造り慣れたヤツデ型の尾をもったものにし、石も恐らく高級砂岩を調達する時間の余裕がなく手近にあった花崗岩を使ったのであろう。硬い石であったために、耳は張り付いた形になり、脚が丸みを帯びたものになったと考えるとわかりやすい。この2件の制作時期は恐らく9月よりもかなり前とみてよいのではないだろうか。先にできたS19（S10-S18）西・蛭子の奉納月9月（旧暦）は、秋の祭りと関係がありそうで、前もって予定されていた奉納時期であろう。佐吉が早く造ったために、狛犬が制作されてからかなりの時間を経て奉納されたとみることも可能である。S18（S19-S11）八滝・五社は、引き渡された後、それ程間をおかずに設置されたのではないだろうか。

なによりも佐吉は、次の非常に重要なS11柏原・八幡を早く造る必要があったのである<sup>2)</sup>。その狛犬の全体の構想は第Ⅲ期で工夫し獲得した流れ毛スタイルの尾をより発展させ、堂々とした姿で、鬣等も工夫をこらしたものである。その中で耳と脚は、S18（S19-S11）八滝・五社での試みが気に入ったのだろう。S11柏原・八幡に取り入れ、それ以降の第Ⅳ期のスタイルになった。

## 謝辞

狛犬を発見し、お知らせ頂いた「古道紀行おおばこの会」亀山幸治氏、竹市信一郎氏、連絡の労をとって頂いた「奈良石仏会」杉本佳代子氏に深謝の意を表します。

## 引用文献

- 1) 磯辺ゆう（2007）丹波佐吉の狛犬1－記載．奈良文化女子短期大学紀要38：19-30.
- 2) 磯辺ゆう（2007）丹波佐吉の狛犬2－考察．奈良文化女子短期大学紀要38：31-42.
- 3) 磯辺ゆう（2008）丹波佐吉の石造物とその一生．奈良文化女子短期大学紀要39：1-38.
- 4) 磯辺ゆう・小寺慶昭（2009）丹波佐吉の新発見狛犬－醍醐・春日神社．奈良文化女子短期大学紀要40：29-39.
- 5) 磯辺ゆう（2010）丹波佐吉の狛犬再記載－八滝・五社神社．奈良文化女子短期大学紀要41：23-34.
- 6) 「石仏の辻」 <http://sekibutuwalk.blog99.fc2.com/>
- 7) 小寺慶昭（2003）大阪狛犬の謎．276pp. ナカニシヤ出版.
- 8) 改訂大和高田市史前篇（1984）大和高田市史編纂委員会編．943pp. 大和高田市役所.